

『はっこいリターンズ！くはらぺこお嬢様は恋を知らないく』

特典シナリオ台本

【登場人物】

椿 つみき（15）

——恋を知らないグルメなお嬢様

時音女子高等学校一年生。

食べることが大好きな品のあるお嬢様。

いつもニコニコしている癒やし系マイペース。

高級フレンチからB級グルメまで

美味しいものには目がない。

恋愛に疎く、自分の抱いている気持ちはまだ説明できない。

年齢…15 身長…160（ふつうより少し大きい）

血液型…O型 バスト…D

【あらすじ】

時音女子高等学校の入学式にきた『私』

校内を歩いていると

見知らぬ背の高い女の子から声を掛けられる。

まるで私のことを知っているかのように

楽しみに話す彼女は『椿 つみき』と名乗った。

戸惑う私に対し、つみきはこっそり耳打ちする。

「…私、未来から戻ってきちゃったみたい」

自分がなぜタイムリープしたのか分からないつみき。

私と二度目の高校生活を過ごすうちに、

自分の中で生まれている感情を意識し始めて…。

どうして戻ってきたのか自覚したつみきは、

『私』との恋を成就させるため、まっすぐアプローチしていきます！

まだ恋を知らないうぶな彼女とのストーリーをお楽しみください！

【第一話…未来からきた少女】

○中庭（お昼）

「私」が時音等々学校の入学式。

中庭を散歩していると、

少し身長の高い女の子がこちらを見ていることに気づく。

「（お菓子を食べながら、歩いているつみき）
入学式……なつかしいなあ。」

（お菓子を食べて）んー、おいしい」

「（少し離れたところから私をみる）んー、ん？
あっ！いた！いたいたっ！」

その女の子は走って近づいてくる！（あまり早くはない）

「（軽い息遣いがこちらに近づいてくる）」

少女は、私の目の前に現れる。

「おーい！」

少女、いきなり私に抱きついて

「あいたかったー！

もう、ずっと探してたんですよ？」

「教室にいなかったから、どこかなーって。
学校の中、散歩してました？」

少女、抱きつきを解除して

「(きかれて) …新入生? …私?

うん、そうみたいです! どうやら!」

「(リアクションが変だと気づいて) …ん? あれ?
あ、そっか。私のこと、まだ知らないんですよね…」

「じゃあ、あらためて自己紹介しますね!
私、つみき。椿つみきです」

「好きなことは、食べることです!
よろしくお願いしますっ」

「(聞いて) うん。

あなたのことはよく知ってます」

「なぜかといえば…。
んー……。んー…。」

「…ちょっと耳、貸して?」

つみきは、こっそり私に耳打ちする。

「(こっそそ声で) これ、誰にも言わないで欲しいんですけど…」

「…私、未来から戻ってきちゃったみたい」

つみき、離れて

「こういうの、なんて言うんですたっけ…。
……たいむすりっぷ?」

「あのね、学校の裏側に、時音神社ってあるでしょ？
…卒業式の日にそこでお願い事してたら、
気づいた時には入学式の朝で」

「ほんと、びっくりしました。

もう一回高校生やるんだなあって…。
こんな不思議なこと、あるんですね」

「あ、信じてないって顔してますね…？
でも、本当なんですよ？」

「…うん、だから、知ってるの。あなたのこと。
私たち、仲良しだったんです。三年間ずっと」

「…話しかけたのは、もう一度仲良くしたいって、
ところもあるんですけど…」

「…もっと一緒にいたいって思ったから、かなあ」

「（無邪気に） あっ、好きだからってことかもしれない！
うん、好き、好きだ！ ってことかも！」

「……ん？ なにか変なこと言った？ 私？
どういう意味って…。」

好きは好き、だけど…？」

「ごめんなさい！

いきなりペラペラ喋られたら…。
そうだよね、私、ちょっと浮かれちゃって（苦笑）」

「……仲良くしてくれるの…？ほんとに？
ありがとー！ やっぱり、やさしいね…！」

「あ、そうだ！

学校の中、案内してあげる。

私、詳しいんですよ？」

「食堂の日替わりメニューでも

購入のオススメでもなんでも聞いてね！

ふふっ」

【第二話：空とパンとつみき】

○お昼休み（屋上）

お昼を一緒に食べる約束をしていた二人。

私はクラスで流行っているという少女漫画を読んで待っている。
しばらくすると、屋上につみきがやってくる。

つみきは購買でおすすめのパンを買ってきたようで……？

（両手にいっぱいパンを抱えている）

扉越しにつみきの声がする。

「あ、あのー！すみませんー！つみきです！

両手塞がっちゃって…開けられなくて…！」

私、扉をあける。

「ありがとうございます！」

購買、結構並んで、ちょっと時間かかっちゃいました。

はあ、お腹すいた〜」

歩いてフェンス越しに座る。

「（のびして）ん〜、ぽかぽかしてて、いい天気。

私の経験上、屋上で食べる購買パンが一番美味しいんですよ！」

つみき、購買のパンを複数広げる。

「は〜い！いっぱい買ってきましたよ？

どれでも好きな選んでください！」

「私のオススメは：（考えながら）
どれもオススメなんですけど…。
やっぱりこの時音スペシャルですかね！」

「毎シーズン旬のものを取り入れた豪華なサンドなので、
絶対抑えておきたい逸品です…！」

「他のも美味しいので、好きな選んでください！
はずれはないです！」

私、一つ手に取って

「あ、それにします？」

「なら、私は…：これ！」

パンのビニールを取って

「いただきまーすっ！」

2人ともパンを食べる。

（2、3口。食べているリアクション）

「（食べながら）んゝ、おいしいゝ！
そっちも一口ください…！」

私、つみきに食べさせてあげる。

「…あーん。」

（食べているリアクション）んゝこちらも美味です！」

自分のパンを食べているリアクション。
水筒の水を飲む。

「（水を飲んで）ふわあー……。
ごちそうさまでした」

「やっぱり時音の購買パンは一味違いますね……。
手作りならではの生地と中身のバランスが絶妙で…」

「あ、口に何かついてますよ？
ほら、口の横…。ソースかな？」

「ちょっと待って、取ってあげる」

つみき、ティッシュを取り出して近づく。

「はい、じっとしてください？」

私の口元を拭ってあげる。

「…ふふっ、とれました」

「……ん？どうかしました？
……私、何かおかしいです？」

「あー、おかしいは、おかしいですよね。
いきなり未来からきたって言う人なんて」

「うーん。どうしてこうなったか……。
……どうしてなのでしょう」

「覚えているのは…。
卒業式の日、なんだか寂しくなっちゃったんですよ。
私、この町から出るようになってたので」

「……はい。」

それで離れ離れになっちゃうの嫌だなーと思って、時音神社に。

縁結びで有名なので、ご利益りやくあるかなと」

「ふふっ、ほんとに。ご利益がありました…！」

原因はわかりませんけど……。

ともかく、また一緒に過ごせて私は嬉しいです！」

「実は仲良くなるのも遅かったので、

一緒にいけなかったお店もあったり……あっ」

「と、いうことは、……待ってくださいね……。

カフェ・ルミエールもフローラキッチンもまだ閉店してない……！
なんということでしょう！」

私に、近づいて

「行きたかったスイーツのお店です！」

今度のおやすみにいきましょ！ ぜひ、いきましょう！」

「約束ですよ……！ふふふっ」

間。

「……そういえば、さっき何読んでたんですか？
待ってる時」

「ああ！ その漫画、たしか流行ってました！
（言い直して） いや、流行ってますよね」

「きみせかって、ひよりちゃんたちが言ってたような…。
『きみの世界は廻り続ける』でしたっけ…？」

「私は、読んだことなくて……。
というか、漫画自体読んだことないです」

「えっ、そ、そんな驚くことですか？
家では読まなくていいと言われてましたし…。
特に機会もなかったので…」

つみき、漫画を受け取って

「…これは恋愛漫画というジャンル、なんですね」

「…：貸していただけのんですか？

ありがとうございます！

今度会う時まで読んでくれますね！」

【第三話：あいまいハニーパイ】

○駅前（お昼）

休みの日。駅前で待ち合わせすることになった私とつみき。
私が待っていると、つみきが車に乗ってやってくる。

私の前に車が止まる。

扉が開いてつみきが降りてくる。

しかし、どこかぎこちない様子で…。

「（運転手に向かって）こ、ここでいいです。
ありがとう」

車、離れていく。

つみき、私のもとに近づいてくる。

「（どこかよそよしく）お待たせしてすみません。
家が出るのが遅れてしまって…」

「……あー。」

きよ、今日のお洋服、可愛いです。
髪型もばっちりでよく似合ってます」

「へ、え？ 私?!」

な、なにか？ なにか変ですか!？」

「（格好似合っていると云われて）

……あ、私の格好？

うん……うん。

そ、そうですか…？

気に入ってくれたなら嬉しいです」

「このワンピース、今日のために買ったから……。」

「……というのが好みかわからなくて、ずっと迷ってた……」

「……な、なんですか？」

「……さっきから、目が合わないのは、」

（照れて）「……合わせようとしてないからです……！」

「い、いいんです！ 気にしないで！
いきましよう！」

スイーツのお店に向かって歩き始める。

「（話し出せない緊張の間）……」

「え？ あ、は、はい。なんででしょう？」

「そうですね……。
なんか緊張してるのかも……」

「た、たぶん、あの……影響です」

「この前貸して貰った漫画……。
は、はい！ きみせかです！
とても面白かったです」

「ほんとに読みやすいし、続きは気になるし……。
個人的に自分で全巻買ってしまいました。
最新の23巻まで……」

「あ、そこまでは読んでないんですね。
じゃあ、私、追い越しちゃいましたね（笑）」

「きみせかって、

好きな人のために、時間を遡りながら、
色んな世界を回るじゃないですか」

「そう、タイムリープ。

私の状況も、そう言うみたいですネ…」

「はい、ちょっと、自分の境遇に重ねてしまっ…。

…私も、好きで、未来から戻ってきたので…」

「（照れて）え？す、好きの意味？

好きは、好きですよ…！

それ以外ないじゃないですか！」

「あ、つきましたよ！ お店！

ほら、早く入りましょう！」

○スイーツ店

つみきと私、扉を開けて中に入る。（アンティークな店内）

優雅なBGMがかかっている。

「（お名前伺われて）

…はい、椿つみきです。2名で予約してます」

「窓側の席みたいです。

いきましようっ」

店の中を移動して席に着く。

「いい雰囲気ですね…。

すこし大人っぽい空気」

「（こっそり）私たち以外は、お姉さま方ばかりですね。
…ふふっ、ちょっとドキドキします」

「あ、そこにメニューが……。
ありがとうございます」

私にメニューを取ってもらって、つみき近寄って見る。

「わっ！ えっ！

かわいい！ 美味しそう！
どうでしょう…！」

「んっ、どれも魅力的で迷っちゃいますね……。
タルトもいいですし、パフェもいいなあ。

うーん……。 （ぼそっ） ぜんぶ食べちゃおうかなあ」

「…どうします？

（話を聞いて） ……ふん、…ふん。

あ、それもいいですね。

それなら、これ二つ頼んで、シェアするのはどうでしょう？」

「セットで飲み物も頼みましょうか。

（近くにいる店員さんをひかえめに呼ぶ） すみません…！」

「こちらを一つずつ…。

それから飲み物は……。私は紅茶で」

「（飲み物を聞いて）何にします？

…うん。じゃあ、それをお願いします」

「…あ、この隙に」

つみき、カバンを開けて漫画を取り出す。

「漫画、ありがとうございます。
お返しします」

「…続き読みたいなら、貸しましょうか…？
なんなら、私の家に来てもらってもいいですし…」

「あ、でもそんな、無理しなくても！ 大丈夫ですけど…」

店員さんがスイーツとお茶を持ってくる。

「わああ！ きましたよ！ きました！

（感嘆の声）はああ」

「いただきます！」

つみき、ケーキをとって

フォークで切り、食べる。（具体的には特定しない）

「（食べて）はああ……。

幸せ。口の中でとろけます……」

「ちょっと、食べてみてください！」

「（何か気付いて）……あ、いや」

やや間があって

「（少し恥ずかしそうに）……た、食べさせても、いいですか？」

つみき、ひとかけら切り出して

「…はい。あーん」

「……どうですか？

（感想をきいて）うん、その顔は……？
美味しい、ですよね！」

「そ、そっちも私、食べてみたいです！」

「（期待する間）………」

「……食べさせて、くれたり……？」

「（恥ずかしそうに）……あーん………」

「（食べて）ん！んー！
こっちも美味しい！」

「ふふふっ。

……私、今、とっても……（何かを言い淀んで）」

「（ちょっと恥ずかしくなって）……いえ、なんでもないです」

「…これ食べた後、
寄りたい場所があるんですけど…
いいですか…？
ありがとうございますっ」

【第四話…そして焦がれる恋心】

○時音神社（夕方）

つみきに連れられて、神社にやってきた私。

「（階段登って）よし、よし、よいしょー！」

（短く息吐いて）つきました！時音神社！」

「（息を整えて）ふうー……。」

…境内の中って、空気が澄んでいて…
なんだか背筋が伸びます」

「え、あ、ここにきたのはですね…。」

…その、神様にお礼を言いたくて。

また、一緒に過ごす機会をくれて、ありがとうございますって」

「はい。お参りしていきましょう」

二人、賽銭箱の前へいく。

「（財布の中みて独り言）えっと…五円玉は……あれ？ ない」

「あー……。いや、大丈夫！ 5円の1000倍入れます！

お世話になってますから！」

二人、賽銭箱に硬貨を投げ入れる。

つみき、鈴緒を降る。二礼二拍一礼。

「……はい。おわりました。

そこでちょっと、休憩しましょう」

つみきと私、ベンチに座る。

「…時音神社って、不思議な感じがします。
この街を高いところで、見守っていてくれるような…。
縁結びの神様を祀っているからかな…?」

つみきは、呼吸を整える間をとって、
自分の気持ちを言葉にしていくな。

「…私、考えてたんです。

どうして神様は、私をタイムリープさせてくれたんだろう。
どうしても一度、高校生をやり直しさせてくたんだろう…」

「…最初は、正直、ラッキーだなあ、くらいにしか思ってませんでした。
(ためて)…でも私、気付いちやっただんです」

「私の中には、ずっとあったのかもしれない。
でも、今まで、そう思わないようにしてきたのかも」

「…自覚したんです、私。
自分の気持ちを」

「…今、私は困ってます。
(私に向かって) だから、困ってるんです」

つみき、私と見つめ合う。

「だって、こんな、喉が渇くような気持ち…。
はじめてで…」

「(言葉が尽きる間)…」

「えーっと…何の話してるんでしょうね、私」

「(相手の様子を探りながら、勇気を奮い立たせる間)
……………」

「……やっぱり、まだ言えないかも……です」

「とにかくですね！とにかく、私は気づいたということを言いたかったですっ！」

「あー、なんだか、おなか空いてきちゃいました！売店寄って帰りましょう！」

つみきと私、売店へ。

「時音神社に来た時は必ず食べるんですよ。
時音まんじゅう」

「ここに住んでたら定番ですよね。
定番なんですけど、
だからこそ、信頼できる味なんですよ」

「(店員さんと呼んで) すみませーん！
時音まんじゅう十二個入りと……。
あ、あと…… (お守りをみてさっと) これもお願いします」

つみき、お財布を出して支払いをする。
ビニール袋に入れてもらった商品を受け取る。

「(店員さんに) ありがとうございますっ」

私と少し歩き始めて

「えっと……はい。
おまんじゅうの他には……。
その……お守りを買いました」

「……定番のです、時音神社の。
こっちの定番は、はじめて買いました」

「……。恋愛成就、です」

ドキドキしている間。

「……。……。信頼できる、はずなので。
……はい」

【第五話…招かれた部屋／紡ぐヒストリ】

○つみきの部屋（昼）

第四話とは別日。つみきの部屋に遊びに来た私。
ソファ―に座って「きみせか」の漫画の続きを読んでいる。

「扉越しにお手伝いさんから紅茶やお菓子を受け取って」
…ありがとうございます。ここで大丈夫。私が持っていくから」

扉を閉めて、つみきが私の元にやってくる。

「どう？どこまで読めました？」

テーブルに置いて座る、つみき。

「（のぞきこんで）あー！……ここですか。
この後の展開がいいんですよえ…」

「ふふっ、続きはお家でゆっくり読んでください。
よかったらお茶とお菓子、どうぞ」

「このカップ、素敵でしょ？
これ、私をはじめて選んで買ったティーセットなんです」

「お母様は、装飾がいっぱいあって煌びやかなものが好きなんです、
私は、このくらいシンプルで親しみやすいものが好き」

つみき、カップにお茶を注いでいく。

「（微笑み）ふふっ。

そう、でも品はあるでしょ？

寄り添ってくれる美しさがいいんですよね」

つみき、カップを手にとって

「(匂いを嗅いで) 落ち着く匂い。
(お茶を飲んで) ……美味しい」

カップを机に置いて

「ふふふっ、お嬢様って感じします？」

「…家では、そんなにはしゃいだりしないかなあ。
あんまり喋ることもないですし」

「んー、お母様もお父様もお兄様も、
お仕事だったり勉強だったり忙しいから。
仲はいいんですけどね」

「大きな家に住んでて、お手伝いさんもいて、
恵まれた環境で育ったことには感謝してるけど…。
ちよっと窮屈、ではあるかも」

「選択の自由は、あまりなかったかな？
漫画、禁止されてたりとか…！」

「小さい頃は習い事ばかり。
…うん。全然、友達と遊べなくて」

「えっと、家庭教師がずっとついてて…。
勉強以外だと、水泳、バレエ、ピアノ、乗馬、茶道とか…」

「いっぱいでしょ？
食えることだけが生きがいだーって思ってた時期もあったなあ。
ご飯で発散してたかも」

「……でも、今はほとんどやめちゃった」

「バレエとピアノはたまにレッスン行ってるけど、もう発表会とかには、さすがに出なくなっちゃった（笑）」

「…高校生になってから、やっと少し時間ができて、いろんなグルメに手を出せるようになったし。あなたとも出会えた」

「ふふっ、あ、私ばかり話してごめんなさい。つい、嬉しくなっちゃって…」

「…すごく楽しかったんです。人生の中で一番楽しい三年間でした」

「……だから、終わってしまうのが寂しかった」

つみき、私の方に頭を寄せる。

「……今日は、あなたに見せたい場所があるんです。…付き合って貰えますか…？」

【第六話…一生に一度の恋を、もう一度】

○ダンスホール

つみきの部屋を出て、無言で廊下を歩き、
二人は自宅のダンスホールの扉を開ける。

「…到着です！」

この場所、何のための部屋かわかりますか？」

「天井が高くて、部屋も広くて……」

つみき、少し走って距離をとって

「走れることもできる場所っ」

「…はい、時間切れ。」

正解は、ダンスホールです」

つみき、私の元に近づいてくる（歩き回っても？）

「この家、元々はお爺さまのもので、
社交ダンスが好きだったお爺さまが、
お婆さまと踊るために作ったらしいんです」

「時々ここで社交ダンスのパーティーもやっていたみたい。
お洒落でしょ？」

「当時、とっても反対されたんだって。
こんな場所じゃないって。でも、お爺さまは譲らなかった」

「…うん、そう。この場所は二人の愛の証。だから、綺麗にそのまま残してるんです。いつ戻ってきてもいいように」

「…私、二人の関係が好きで。

いつか私も大事な人ができたら、

ここで一緒に踊ってみたいなって思ってた」

「…。その、大事な人が、…今、私の目の前にいる人です」

間。

「…私、あまりわがままを言うこともなくて…。

お母様やお父様、家庭教師や習い事の先生、

人に言われたことをやるのは、そんなに苦じゃありませんでした」

「むしろ言われた通りにできた時には、達成感を覚えていたくらい」

「…そのせいか、わからなくなっていました。

自分の感情をどこまで出していいのか」

「…：最初に高校生になって、自分で選べることが増えた時、嬉しくもあったけど、同時に怖くもあったんです」

「今まであった指針がない、

どうやって自分を受け入れて貰ったらいいんだろうって」

「…：自由な私のまま、受け入れてくれる人に出会えるなんて、想像もしてなかった」

「私が何をしても、いつも優しく笑ってくれて。

…なんでも一緒に楽しもうとしてくれる…。

…そんなことされたら、好きになっちゃいます」

「思えば、あの時私、初恋をしていたのかもしれませんが」

「……うん。」

でも、伝えられなかった。

この感情がなんなのか、つい最近までわからなかったから」

「…入学式に戻ってきて、

全然、私のことを知らないのに一方的に話しかけて、
好き好き言って……」

「それでも私のこと馬鹿にしないで、話を聞いてくれて。
……私、またあなたに、…二度目の初恋をしました」

「（真剣な空気で） ……好きです」

「私は、あなたのことが、
……好きです。恋人になってください」

間。

「……あー、…告白、しちゃいました」

「返事は……。」

ゆっくり考えてください。

私、いくらでも待ちますから」

「……。一つ、渡してもいいですか？」

つみき、手紙を私に渡す。

「……これは手紙でもあり、招待状でもあります」

「…もしよかったら、ここで踊って頂けませんか？ 私と」

「……待ってます」

【ボーナストラック…空とお弁当とつみき】

○屋上（昼）

後日談。恋人関係になったつみきと私は、屋上でお昼を食べる。
二人はお互いにお弁当を作って持ってくる。

私の到着を待っている、つみき。

「（鼻歌を軽く□ずさむ）　　♪」

私を見つけて

「あ、きたきた。
おーい」

私、つみきに近づいてく

「あ、その袋…もしかして…？
わー、作ってきてくれた？…楽しみです！
こっち座って？」

私、つみきの隣に座る。

「うん、もちろん、私も作ってきました。
この前買ったお弁当箱に入れて…ほら」

つみき、巾着袋からお弁当箱を取り出す。
私も巾着から弁当箱を取り出す。

「ふふっ、このお弁当箱、やっぱり可愛い。
詰めてるとき、ウキウキしちゃった（笑）」

「色違いが二つ並ぶと、良いですね。
…うん、買って正解。」

あの雑貨屋さん、また行きましょう」

「…：では、お互いのを…：。
交換…：！ しました！」

二人、お弁当箱を交換し合う。

「はー、なんか緊張しますね。」

…：せーの、で開けましょ？」

「(笑って) はい。せーの、ですよ？
せーの、ぱかつ！ で…：！」

「…：行きますよ？ せーのっ！」

「(お弁当箱を開けてみて) わあ…：！ すてき！
おいしそ…：！」

「ふふっ、私のもいい感じ？
ねえ、食べてもいいですか？」

二人、お箸を取り出し

「いただきます。」

…：どこから食べようかなあ。
…：あ、これ？ 自信あります？」

つみき、口に運んで

「(食べながら) ん！ んん…：！
おいしいー！」

「うん、ほんと！」

味の加減もグッドです…！」

「私の食べて食べて？」

お口にあうかわからないけど……」

私、箸で口に運ぶ。

「（食べる様子を伺って）……。

どう？ …おいしい？ よかった〜」

「うん、味、染みてるでしょ？」

それはね二日前くらいから仕込んで…」

「全然、大変じゃなかったよ？

うん、楽しかった」

「お弁当作るの初めてだったけど……。

喜んで貰いたかったから」

「ふふふっ、渡すのも、貰えるのも、どっちも嬉しいね」

「……ふふっ、なに？ みつめて…」

「□？ ついている？ ちょっと？」

「……じゃあ、……とって欲しい……かも」

「……拭くもの持ってる？

ない？ なら……」

私とつみき、顔を近づけていく。

私、つみきにキスする。

「(キスを受けて) ……んっ」

つみき、お返しに軽くキスを返して

「…とれました？

(おかしくなってきた) ぷっ、ふふふっ、すみません…。
ドキドキしすぎて、おかしくなってきたちゃって…」

「(笑いの余韻を引きずりながら) はい。

私から、雰囲気作りしましたけど……。

ここ学校だって、一瞬思ってしまったって…」

「……今まで、帰り道でしかしたことなかったし…」

つみき、私に身体を預けて

「……どうしましょう。

こんな幸せでいいのかな…私」

「(落ち着いて) ……はい。食べましょう。

まだまだ、味わい足りませんから」

【ボーナストラック…ダンスホールマジック】

○ダンスホール

つみきの家に遊びにきた私。

つみきに告白されたダンスホールにやってくる。

私とつみきは、それぞれ綺麗な衣装を身に纏っている。

私はドレス、つみきは燕尾服（タキシード）を身に纏ってる。

ダンスホールの扉を開ける。

「…どうですか？ ドレス？」

あ、ちょっと待ってください。

背中、ちゃんと閉まってない」

つみき、私の後ろに立って、

背中 của チャックを閉めてあげる。

「…うん。これで大丈夫。

（じっと見つめて）んー、やっぱり似合いますね…。ふふふっ」

「せっかく踊るなら、衣装もこだわりたい！と思って、頼んじゃいました」

「うん、たしかに、凝り性なところはあるかも。

でも、どちらかというと、可愛い姿がみたくて…。

そう、お姫様にしたかったんです」

「私はどうです？ 似合ってます？ タキシード。

髪もほら、結んでみました」

「ありがとうございます。」

…かっこいいって中々言われないから、嬉しい。
こういう時、身長あってよかったと思います」

「…うん。…うん。」

ああ、踊れるかなんて考えなくても大丈夫です。
私も習ったことないので、見様見真似ですし…。
雰囲気を楽しみたいんです」

つみき、CDデッキに近くに向かう。

「音楽、かけますね」

つみき、音楽をかけて、私の元に戻ってくる。

♪ラヴェル「亡き王女のためのパヴァーヌ」

「エスコートさせてください、お姫様。」

…さあ、お手をどうぞ」

踊る態勢になる二人。

ぎこちなく、二人は足取りをあわせていく。

「ふふふっ。大丈夫。」

…私に委ねてください」

二人、軽くステップを踏んでいく。

「そうそう。」

……いい感じ」

しばらく音楽と呼吸の間。

「踊りながら呟くように」

……これが、お爺さまとお婆さまが見ていた景色なんですね。
…一つ、夢が叶ってしまいました」

つみき、踊るのをやめて（音楽は鳴り続けている）

「……。いえ、一つどころじゃありません。

今の私は、ちょっと叶いすぎてます。

でも、なくならないんです」

「叶う度、またすぐに新しい夢が生まれて……。

あなたと一緒に過ごす未来を想像して…。

しあわせで泣きそうになる」

「……こんな未来も、あるんですね」

「…あ、また一つ、夢を思い出しました」

「はい。でもすぐに出来ちゃいます、これは。

……お姫様抱っこ、してもいいですか？

それで写真が撮りたいんです」

「ほら、あの壁に飾ってある、お爺さまとお婆さまみたいに。

…いいですか？」

「ありがとうございます！

カメラもってきます！」

つみき、CDデッキを操作して音楽を止める。

近くにあるカメラを持ってくる。

「（独り言を言いながら）カメラ……あった。

（カメラを設置しようとして）ちょっとその場所にいてください。

画角合わせます……！」

「（調整して）うん、大丈夫です。
じゃあ、タイマー押しまーす。
……押ししました！」

つみき、私の元に駆け寄ってくる。

「…足、失礼します。
腕を私に回して貰ってもいいですか？」

「そうです！
したら、あげます。よいしょっと！」

「ふふふっ。
（耳元で）………大好き」

つみき、私にキスをする。
カメラのシャッター音が鳴る。

【ボーナスストラック…さめない夢、ふたりの夜】

○客間

二人で踊った日の夜。

私は、つみきのおうちに泊まることになる。

客間を借りて、寝ようとしたところ

ドアのノック音が鳴る。

「あの、つみき、ですけど……」

私、ドアを開ける。そこにはつみきがいる。

「ごめんなさい。いま、寝るところでした？」

「…うん、うん

そうだね。さっきおやすみって言ったばかりなのに」

「（曖昧な返事） うん……」

中、入ってもいいですか？」

私、ドアを開ける。つみき入ってくる。

ベッドに腰掛ける二人。

「…別に何かあったってわけじゃなくて、

その……

ただ、一緒の家にいるのに、別々の場所で寝るんだって思ったら、
なんか……うん」

「……………今日、ここで寝てもいい？」

「…うん。ちょっと狭いかもしれないけど。

客間のベッド、小さめだから…」

私、ベッドに入っていく。

つみきもまたベッドに入っていく。

「あ、でも全然。

ちようにいいかも。

ちようにど、……くつつける」

「……。今日一日、楽しかったです。

またいつでも、泊まりに来て。

……うん、この客間だったら、いつでも使えるし」

「……次来たときは、私の部屋で寝たいなあ」

問。

「……私、卒業しても、この街に残りたいって言うつもり」

「本当。

私、時音町の美味しいものいっぱい知ってるでしょ？

もっとそれを広めるお仕事がしたいって、最近思ったんです」

「……ふふふっ、神様とあなたが、私を変えてくれた」

「私も頑張った？

……ありがとう」

「そうですね……。

もしこれが長い夢だったとしても、

私はやっぱり、あなたと結ばれたいです」

「もう、何も知らない、何も気づかない私はいませんから。

ふふふっ」

つみき、だんだん眠くなってくる。

「……手、繋いでもいいですか？」

「(少し笑って) ……おやすみなさい」

「……(寝息を立てる)」